

第5章 学生の受け入れ

1. 学部における学生の受け入れ

a. 全学に共通する事項

(学生募集と入学者選抜方法) ★72

学生募集に当たっては、本学教育の概要や出願方法などを、受験雑誌への掲載、新聞広告などを通じて広く受験生に広報するとともに、東海地区の私立大学が共同で開催する大学説明会や業者主催の進学説明会、本学が年2回開催するオープンキャンパスなどで、受験生に詳しく説明している。また、東海地区の高校を中心に、福井、石川、富山、静岡、長野、滋賀等の高校へ、教員全員と入試広報担当職員が大学案内や入試資料を持参して訪問し、進路指導担当者などに本学の教育方針等を直接に説明している。

入学者選抜方法としては、一般入学試験（前期・後期）、推薦入学試験（一般公募制・指定校制）、センター試験利用入学試験（前期・後期）、社会人入学試験、外国人留学生入学試験、海外帰国子女入学試験を実施し、このうち一般入学試験（前期）では4日間の入試日自由選択制を採用している。これらの入学選抜方法を支えている基本的な考え方は、様々な経歴と資質を持つ学生を本学に受け入れるために、多様な受験機会を設けることにある。また、編入学試験としては、一般編入学試験、指定校制推薦編入学試験、社会人編入学試験を実施しているが、これも同様な趣旨である。

社会人入学試験・外国人留学生入学試験・海外帰国子女入学試験は、いずれも特定の経歴や経歴を評価し、小論文や面接をとおして適性を評価する試験である。推薦入学試験は、本学を志望する優秀な学生の推薦を高等学校長に依頼して実施する選抜方法である。推薦入学試験では、従来の指定校制度に加え1998年から一般公募制を開始し、より多くの受験生にその機会を提供するようにした。一般入学試験とセンター試験利用入学試験は、いわゆる学力を中心にした選抜方法である。一般入学試験については1991年から、センター試験利用入学試験については2001年から、それぞれ2月後半から3月にかけて後期試験を実施している。これは、受験生に再度受験の機会を提供するものであるが、一般入学試験の後期試験については、受験科目を1科目に絞ることによって内容的にも前期の入学試験と差別化している。

多様な入学試験制度は、様々な経歴と資質を持つ学生を本学に受け入れるためのものであるが、同時に、本学としては、18歳人口の減少する中で安定した受験者数を確保するためのものでもあった。幸い本学の受験者数は安定した水準を維持しており、本学の学生募集方法と入学者選抜方法は、全体として適切なものであったと評価できる。なお、本学は、入試種別ごとに学生の成績の追跡調査を行っているが、入試種別間の学生群の成績に大きな差はなく、この点でも入学者選抜方法は適切であると言えよう。

本学は、入学者選抜方法の多様化を現在も進めており、2003年度入学試験から文学部がアドミッションズ・オフィス入学試験を実施し、2004年度入学試験から、一般入学試験（前期）については、浜松市・岐阜市・津市・金沢市において各1日の地方試験の実施を予定している。

（入学者受け入れ方針と大学の理念等との関係） ★73

本学は、これまで戦前からの伝統を活かし、女子大学として教養ある女性の育成をめざすことによって、社会的に高い評価を受けてきた。しかし、女性の社会進出が強まる中で女子学生の資格志向も強くなり、大学にも実学的な教育を強く望むようになってきた。このような状況の中で、本学は、学部・学科の改組・名称変更・カリキュラム変更によって、社会で自立して活躍できる女性の育成という新しい教育理念による教育をめざし、2002年より新4学部体制をとるに至った。旧来の本学の教育方針に共感し、子女を本学で学ばせることを望む親も少なくないが、2002年度入学生の受け入れ状況から見て、本学の新しい理念は多くの受験生に受け入れられたものと判断している。

（入学者選抜の仕組み） ★76,77

一般入学試験（前期）の場合、すべての入試教科・科目を1冊にまとめた合冊の試験問題とマーク式答案を使用し、2科目解答、120分間の試験時間で実施している。すべての試験場に、複数の試験監督者を配置し、受験生への指示等は詳細なマニュアルにもとづいて進められている。受験生の体調が悪い場合には休養室で受験できる体制を確保し、遅刻者への対応から、付き添い者用の控え室設置に至るまで、すべての受験生が実力を発揮できるように配慮しており、試験の実施体制としてはおおむね適切であると評価している。不測の事態には、学長を責任者に教務部長・学部長・学部入試委員長が総務に詰めて対処することになっているが、降雪による交通機関の遅れを除きトラブルは皆無である。その他の入学試験は、以上の実施体制に準じ、その規模に応じて実施している。

入学者選抜試験の判定資料は、得点の序列にもとづき受験生の成績一覧表として作成されるが、一切の情実の入る余地が無いように、受験生の氏名等は記載しないようにしている。合否判定の原案は、本学内における併願状況などを参考に、過去の合格後の辞退者数を勘案した上で、各学科で作成され、原案にもとづく学部教授会の審議において合格者が決定される。以上のような合否判定過程においては、個人の情実が入る余地はなく、本学の入学試験合否判定の透明性はきわめて高い。

なお、本学の一般入試（前期）は最大で7科目中から2科目の選択制であり、試験日自由選択制を採っていることから、それぞれの問題ごとの難易度が異なることは避けられない。そのため、各科目の得点を累積頻度による換算式を用いて補正を行い、試験の公平性、適切性を確保している。

(入試問題の検証) ★79

入試問題の作成は、大学入試委員会のもとに組織された一般入試問題作成委員会内の各科目出題委員会が行っている。各年度の出題委員会は、毎年の入学試験終了後、設問ごとの正答率等のデータをもとに、出題問題の難易度等の妥当性を検討し、その反省をふまえて次年度の問題作成を行っている。

(編入学生の受け入れ) ★72,94

3年次編入学生はいずれの学部においても受け入れている。2002年度までは本学には短期大学部が併設されており、その卒業生の中にはかなりの数の編入学希望者がいたため、それを各学部ともに受け入れていた。もちろん、これ以外にも他の短期大学等からの編入学も受け入れてきた。文学部、生活環境学部(2001年度までは家政学部)においては定員を設けることなく若干名を募集するという形態をとってきた。現代文化学部と人間科学部においては、編入学生を積極的に受け入れるという姿勢を明確にし、定員設定を行っている。人間科学部に関しては、開設間もない学部であるために、まだ編入学生の受け入れは生じていないが、現代文化学部については、毎年1学科あたり数名の編入学生の受け入れを行っている。過去数年の状況をみると、編入学の希望は以前に比べるとやや低下傾向にあるため、対象学校を専門学校にまで広げて指定校推薦を行うなどの措置をとって、学科の教育内容に強い関心をもつ学生の確保に努めている。なお、大学全入の時代を迎えようとする中、今後とも継続して編入生の確保を行うことは困難になることが予想され、編入生の受け入れ方針についての検討が必要であろう。

(転学部・転学科) ★94

本学は、1998年より、転学部・転学科の制度を導入している。入学後、大学での学習過程で別の進路を選択する学生が出てくるが、それらの学生に本学での学習を活かし、同一学部の別学科(転学科)、他学部の学科(転学部)への進学道を開く制度である。転学部・転学科試験の実施の決定、本人の申し出、転出学部の承認、選考試験の実施、転入学部の承認の手順については定式化され、スムーズに運用されており、この制度の適用によって、これまで、6人の学生が新しい進路を歩んでいる。

(入学者選抜における高・大の連携) ★83,84,85

入学者選抜における高・大連携は併設高校との間では組織的に行われており、高校1年段階から高校との連携のもと大学説明会を開催し、また、併設高校在学生向けのオープンキャンパスも実施している。大学と併設高校の間では生徒の進路希望などを参考にして受け入れ人数を調整している。一方、このような説明を受けた上で提出された生徒の進路希望にもとづいて、高校での成績などを勘案しつつ学科・専攻選択を行っている。このような調整の結果、併設高校からはほとんどの生徒が第1、または第2希望の学科・専攻に進学できる状況になっている。

一方、その他の高校生に対しては、年に2回のオープンキャンパスを開催し、本学における教育内容を理解してもらうよう、授業などの体験の機会を設けている。また、各高校に対しては「出前授業」と称して、希望に応じて本学の教員が出向いて授業を行っている。この試みによって、本学の教員の教育研究内容に親近感をもってもらい、また大学における教育内容を理解してもらっている。出前授業については毎年40件程度の希望を受けている。これらは選抜そのものの連携ではないものの、高校生がより適切に自分の進路選択を行ううえで有効に機能している。

なお、推薦入学により入学が決定した高校生に対して、文学部と生活環境学部においては、入学前学習プログラムとして課題を与え、レポート提出を求めている。レポートは添削して返却するが、このプログラムは、入学選抜から大学教育の開始に至るまでの間の高校との連携の一環と考えており、高校生の大学教育への理解を深めると同時に学習意欲を高めるものとして、大学の事前教育として高校側からも歓迎されている。このような試みについては、今後他の学部においても実施に向けて検討を行っている。また、併設高校との間で同様の趣旨から、高校3年次後期に高校生対象の授業プログラムを大学において実施し、大学の単位を入学前に修得できる制度の検討を進めている。

高等学校の「調査書」については、受験生の高校における勉学と生活の貴重な資料として入学者選抜において活用している。とくに一般公募制推薦入学試験においては、合否判定の資料として重要な役割を果たしている。

高校生に対して行う情報伝達や進路相談としては、本学主催の大学説明会や進学説明会、オープンキャンパス等において、大学案内や入試ガイドなどの資料をもとに、直接高校生と面談して詳しい説明を行っている。とくにオープンキャンパスには、例年、1,200人を越える高校生が参加し、入学後の調査によればこのオープンキャンパスでの説明を受けて希望の学部・学科を決定したという学生が多い。こうした事実からみて、高校生に対する進路相談等の情報伝達は適切であると言えよう。また、高校で実施されている系統別・分野別説明会（文学系、家政系など）に教員を派遣し、本学における教育の特徴についての説明を行っている。

（科目等履修生・聴講生等） ★87

本学には、科目等履修生、聴講生、特別聴講学生の制度があり、学則に明記するとともに個別に規程を設けている。科目等履修生、聴講生は、基本的にはほぼ同様の規程ではあるが、受け入れ基準については多少異なり、科目等履修生では、通常、大学に入学できる者の種類を明示した学則を準用することになっているが、聴講生では、基本的には同様な基準ではあるものの若干緩やかな規程となっている。また、1単位あたりの受講料も科目等履修生が2万円であるのに対して、聴講生は1万円となっている。この理由として、科目等履修の場合は単位認定を前提にしているのに対し、聴講は、教養を深めることが目的であることによる。ただし、科目等履修生、聴講生とも出願にあたっては理由を書かせるようにし、学習の目的を明確にしている。出願された後の手続きは、受講する科目を担当

する教員の承認後、該当する学部教授会の承認を必要としている。この制度にもとづく履修者数は、表 5-1、5-2 のとおりである。2002 年度後期の科目等履修者の履修目的は教免取得のためが 6 名、資格取得のためが 2 名、教養を深めるためが 2 名となっている。また、聴講では全員教養を深めることが理由となっている。このような状況であり、適正に運営されていると考えている。

表 5-1 科目等履修生制度にもとづく履修者数

	2000 年度		2001 年度		2002 年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
文学部	1	1	2	2	2	2
家政学部	1	1	2	0	3	3
生活環境学部					0	0
現代文化学部	0	0	1	1	2	2
人間科学部					0	0
共通					0	4

表 5-2 聴講生制度にもとづく履修者数

	2000 年度		2001 年度		2002 年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
文学部	4	3	2	3	1	1
家政学部	4	4	3	3	0	0
生活環境学部					2	2
現代文化学部	0	0	0	0	1	1
人間科学部					1	2

特別聴講学生については、他の大学または短期大学との協定にもとづくものとし、制度化している。具体的には 2002 年度から愛知県内の国公立全大学と包括的な単位互換協定を締結し、運用を開始したところであり、評価についてはもうしばらく時間を要するものの、2002 年度前後期とも 4 名の学生を受け入れたが、概して好評であった。

(定員管理) ★91

本学は現在新たな 4 学部体制に移行した直後であるために、当面は現在設定している定員の充足に最大限の努力をする必要がある。しかし、社会情勢の変化は激しく、それぞれの学科・専攻の定員設定は定員充足率はもとより受験生の志願状況も常に点検しつつ、変更の要があればすばやい対応が必要であると考えている。本学は常設の委員会として将来構想検討委員会を置いており、常に定員変更も視野において検討を継続する予定である。なお、新たな 4 学部体制の構築にともなって、本学では併設の短期大学の募集を停止し閉学するため、今後、定員変更に関しては手続き上速やかな対応が可能な状況となるので、迅速かつ適切な対応を行っていくことができると考えている。

b. 文学部

(入学者選抜) ★72,73,74,75

文学部の教育目標は、言語表現の重視と文化全般への関心・理解を深めさせるということである。この目標を理解し、興味を寄せる学生の入学を願うのはもちろんだが、他方、様々な個性や発想力を持つ学生の入学も期待されている。そこで、文学部では多様な入学者選抜方式を用意して、受験生が自分の資質に合った入試方法が選べるように工夫している。

一般入試は本学部への入学を希望するあらゆる受験生に門戸を開いている入学試験である。しかし、この入学試験においても文学部は、それぞれの学科の教育目標に沿った学生を選抜するために、日本語日本文化学科は国語に、英語英米文化学科は英語に傾斜配点をしている。

推薦入試制度には2つの制度がある。第1の指定校推薦入試は専願とし、面接試験のみを課してそれぞれの学科への入学意思が強いことを確認の上、入学を許可する制度である。第2の公募制推薦入試は、併願を認めているが、小論文を課して、成績だけではなく言語表現力の豊かな、社会性のある学生を幅広く受験させるための制度である。

センター利用入試では国公立大学との併願の受験生も多く、オールラウンドな学力を有する学生の応募を期待している入学試験である。さらに社会人入試制度と海外帰国子女入試制度があるが、これはそれぞれの受験生の貴重な経歴や体験を活かして、入学させるための制度である。

表5-3 文学部 募集人数の入試別割合 (2002年度)

学 科		一般入試	センター利 用入試	指定校（併設校 を含む）推薦	公募推薦	計
日本語日本文化学科	募集定員	30	8	25	7	70
	割合	42.9%	11.4%	35.7%	10.0%	100.0%
英語英米文化学科	募集定員	39	9	37	10	95
	割合	41.1%	9.5%	38.9%	10.5%	100.0%
言語文化学科	募集定員	35	8	30	7	80
	割合	43.8%	10.0%	37.5%	8.8%	100.0%
合 計	募集定員	104	25	92	24	245
	割合	42.4%	10.2%	37.6%	9.8%	100.0%

(アドミッションズ・オフィス入試) ★81

文学部は、他学部在先駆けて 2003 年度入学試験から、アドミッションズ・オフィス入

試を実施した。この入学試験については、前年度の 2001 年度より、入試委員会や教授会で推薦入試との差異化を中心に議論を重ね、大学生活の中でリーダーシップのとれる資質と明確な目的をもって学問に取り組む姿勢という 2 点を選抜基準として最も重視するものとして実施に至ったものである。学生の中には、他人との関わりが苦手なクラス内で孤立する傾向のある学生がまま見られるが、リーダーシップのとれる学生の存在がそのような学生達を含めてクラスのリーダーとしての機能を果たすことにねらいがある。

この入学試験の実施組織としては、入試委員会とは別に AO 入試委員会を立ち上げた。具体的な選抜方法は、志望動機書と小論文とグループ討論に、それぞれ 30 点・30 点・40 点を配し、受験生同士のグループ討論では、積極性、発言の的確性、協調性、社会認識の度合などを評価した。幸い意欲的な学生が応募し、初年度の入学試験は順調に滑り出した。アドミッションズ・オフィス入試では学力評価よりも個々の学生の意欲や個性に重点をおいて選抜をしているので、入学者の意欲が大学教育の中で旺盛に発揮されるよう、入学前学習プログラムを充実させ実施している。

(収容定員と在籍学生数) ★89,90

2002 年度における 4 学年の学生収容定員と在籍学生数の比率は、日本語日本文化学科（日本文学科を含む）は 1.06 倍、英語英米文化学科（英文学科を含む）は 1.13 倍、言語文化学科は 1.23 倍で、全体として適切な比率になっている。日本語日本文化学科は学科名称変更前に教育課程がやや古典文学に偏った科目構成だったので、教育課程と学科名称を変更し、学生確保に努めた。これを反映してか、2002 年度は合格者の定着率が上がり、入学者数の定員に対する比率は前年の 0.97 倍から 1.43 倍になった。つぎに英語英米文化学科は、志願者数が恒常的に多く、その一方で定着率が安定しないため、毎年入試判定に苦慮しているが、今後とも適正な学生数の確保のために慎重を期していきたい。言語文化学科は、志願者数はさほど多くないにも関わらず、定着率が比較的高くまた安定しているので、安定的な入学者確保ができています。

このように継続的に著しい定員超過をしている学科はないが、今後も適正比率を維持していけるように、入試判定には一層慎重を期したいと考えている。

(退学者) ★93

退学者は、1999 年度は 28 名、2000 年度は 24 名、2001 年度は 25 名である。その理由はさまざま、残念ながら途中で学習意欲を失う者、あるいはより前向きに自分の将来を考えて進路変更をする者などである。後者の例としては、留学後にさらなる外国語の研鑽のために外国の大学へと移っていく者もいる。いずれの場合も、担任がその学生とよく話し合い、できるだけ学生の将来のためになるよう指導している。

c. 生活環境学部

(入学者選抜) ★72,73,74,75

表5-4 生活環境学部 募集人数の入試別割合 (2002年度)

学 科		一般入試	センター利 用入試	指定校(併設校 を含む)推薦	公募推薦	計
生活環境情報学科	募集定員	35	10	35	10	90
	割合	38.9%	11.1%	38.9%	11.1%	100.0%
環境デザイン学科	募集定員	45		40	5	90
	割合	50.0%	0.0%	44.4%	5.6%	100.0%
食環境栄養学科	募集定員	30	10	35	5	80
	割合	37.5%	12.5%	43.8%	6.3%	100.0%
合 計	募集定員	110	20	110	20	260
	割合	42.3%	7.7%	42.3%	7.7%	100.0%

生活環境学部の教育理念・目標は、先にも述べたように、当面する生活諸課題の解決と真の生活の豊かさを実現するために必要な知識・技術を身につけた人材を育成することである。この学部の目標を理解し、目的意識が明確で、勉学意欲の旺盛な学生の入学が望まれる。また、新たな環境を創造する能力を育成するという学部の教育目標に照らして考えるならば、単に学力のみならず、さまざまな個性と豊かな発想力を有する学生の入学が望まれる。その意味では、多様な入学者選抜方式を採用している本学の入試制度はその目的に適合していると考えられる。

推薦入試制度は、本学への入学意志が強く、能力・素質・適性があり、かつ人格が優れ、魅力ある個性を有する生徒を学校長の推薦にもとづき判定する入試制度であるが、それぞれの学科の教育を受けることを強く願い、かつ個性豊かな学生の入学を期待している。その選抜にあたっては、志望理由書を重視している他、生活環境情報学科や環境デザイン学科においては、指定校選定の際、情報、家庭、デザイン、被服といったいわゆる普通科以外の専門学科を有する高校を指定し、特に、勉学意欲の強い学生に入学してもらえるような配慮をしている。

一般入試は、本学への入学を希望する生徒に広くその機会を提供する入学試験であり、まさに多様な学生の入学が期待される。センター利用入試は主として国公立大学との併願の学生が多く、オールラウンドな学力を有する学生の入学が期待される。その他、社会人、海外帰国子女にも入学の機会を提供する入学試験を行っているが、社会人の場合はその社会体験が、海外帰国子女の場合はそれぞれの異文化体験が、他の学生にさまざまな好影響を与えるであろうし、教育上好ましい効果を発揮することが期待される。

生活環境学の学問の対象は、生活環境、つまりヒトとモノの相互作用である。それぞれ

の学科のカリキュラムには、程度の差こそあれ、自然科学分野（理系）と社会科学分野（文系）の2つの領域が含まれる。したがって、この両方の分野の基礎学力を合せもっていることが望まれるが、推薦入試では学力試験を課さず、その他の入学試験でも1教科ないしは2教科の学力試験結果だけで判定をしている現行入試制度では、入学後の学習にある程度の支障が生ずるのは避けられない。その問題を乗り越えていく手段としては、きめこまかい指導以外にないと考えている。すでに2学科では、オフィスアワーを設け、教員が学生の質問や相談に応ずる体制を整えているが、その他、食環境栄養学科では、高校時代に化学を履修しなかった学生や不得手な学生を対象にして補習を行ったが、このような学生の勉学を支援する体制を強化することが必要であると考えている。一方、教員の中からは入試科目の見なおしを指摘する声も聞かれる。この点に関しては、入学後の学生の勉学状況を見ながら、カリキュラムと入試科目との関連について検討することになっている。

（収容定員と在籍学生数） ★89,90

2002年度の入学生について、入学定員と在籍学生数の関係を見ると、生活環境情報学科は入学定員90名に対し在籍者108名（1.20倍）、環境デザイン学科の場合、入学定員90名に対し在籍者112名（1.24倍）、食環境栄養学科の場合、入学定員80名に対し在籍者83名（1.04倍）という結果となっている。いずれも入学定員を超えているが、教育上の支障は今のところ生じていない。したがって現在のところほぼ適切な定員を確保していると考えている。なお、食環境栄養学科の場合は、実験・実習の設備の制約等があるが、定員の4%増であるので、この点での問題はない。また、実験・実習が多い環境デザイン学科、食環境栄養学科の場合は、定員を大幅に超えた場合は、教育水準の低下を招く恐れがある。したがって、その点を配慮しつつ、慎重な入学者判定を行っている。2002年度入学試験においては、学生確保の状況は適切であり、特に支障なく円滑に授業が行われている。

（退学者） ★93

退学者については、1年を経過した現段階では発生していない。なお、今後の動向をみる必要があるが、2003年1月に実施した「大学生活・勉学に関するアンケート調査」結果によれば、将来の進路に不安を感じている学生がいることが確認されている。そうしたことから退学者の発生を極力少なくするためにも今後の学生指導のあり方を継続的に検討する必要があると考えている。

d. 現代文化学部

(入学者選抜) ★72,73,74,75

表5-5 現代文化学部 募集人数の入試別割合 (2002年度)

学 科		一般入試	センター利 用入試	指定校(併設校 を含む)推薦	公募推薦	計
国際社会学科	募集定員	40	10	30	5	85
	割合	47.1%	11.8%	35.3%	5.9%	100.0%
情報文化学科	募集定員	45	10	35	5	95
	割合	47.4%	10.5%	36.8%	5.3%	100.0%
福祉社会学科	募集定員	40	10	30	5	85
	割合	47.1%	11.8%	35.3%	5.9%	100.0%
合 計	募集定員	125	30	95	15	265
	割合	47.2%	11.3%	35.8%	5.7%	100.0%

現代文化学部は現代社会の文化を切り開く実践的な女性の育成を目的としている。したがって、多様な個性と柔軟な発想力を持つ学生、実社会における活動をめざす学生の入学を期待して、多様な入学者選抜方式を用意している。

一般入試は表 5-5 に示すように最大の割合の学生を受け入れる試験方法であり、多様な科目設定の中から選択をさせて受験させるものである。本学部は社会科学的な色彩の強い学部ではあるが、情報系や統計を用いる内容も含まれるために、数学を含む自然科学系科目を受験する学生にも期待している。幸いなことに、かなりの学生がこれらの科目で受験していることは学部の期待が適切に受験生に伝わっているものと考えている。

この他の入試方法としてはセンター利用入試と推薦入試がある。前者は国立大学との併願の受験者が多く、オールラウンドな学力を持つ学生の受験を期待するものである。また、推薦入試は指定校推薦と公募制推薦を行っており、特に実務的な活動への志向の強い学生を求めるために、各学科ごとにどのような学生を求めるのかを充分議論した上で、選考を行っている。これ以外には、社会人入試制度と海外帰国子女入試制度があるが、特に福祉社会学科ではこれまでかなりの数の社会人の入学者を得ている。

現代文化学部では 2002 年度にそれまでの 215 名から 265 名に入学定員を増員した。しかし、一般入試の受験数が横這いか減少傾向であるため、今後一層、確実な学生確保をめざした取り組みの必要性を感じている。現代文化学部の 3 学科はそれぞれ教育目標が異なるため、3 学科の入学者選別における力点を変えることで各学科の定員確保につとめている。

国際社会学科は、グローバリゼーションが進む今日の国際社会のなかで、異文化との共生を積極的に行う女性を育てることにある。そのため、指定校推薦入学試験については国

際科や外国語科などのカリキュラムを持つ高校を積極的に指定するように工夫し、本学科での高い学習意欲をもつ学生の確保に努めている。

情報文化学科の教育目標は、IT化の進む現代のなかでコンピュータを中心としたビジネスやマーケティングも視野に入れた情報発信のできる女性を送り出すことにある。指定校推薦入学試験では、情報科を持つ普通高校だけではなく商業高校も積極的に指定し、これらの分野に高い関心をもつ学生の確保をめざしている。

福祉社会学科は社会福祉と社会学という 2 本の柱を教育目標に掲げている。そのため、普通高校以外にも福祉科や医療・福祉関係のカリキュラムを持つ高校への指定を行っている。

(収容定員と在籍学生数) **★89,90**

学部としての 1 年次入学定員は上記のとおりであるが、本学部では 3 年次編入学生を各学科とも 5 名ずつ受け入れており、3、4 年次学生については、1 学年の定員は 2001 年度までの 230 名から 2002 年度は 280 名と増加することとなった。

2002 年度入学生についてみると、入学定員に対する比率は 1.30 倍であり、2001 年度までに入学した在籍学生数と定員との比率は 1.24 倍である。2002 年度の比率がかなり高くなっているが、これを学科別にみると、国際社会学科 1.53 倍、情報文化学科 1.24 倍、福祉社会学科 1.13 倍となっている。学科ごとのばらつきが大きく、とくに国際社会学科が非常に高いことは教育上支障のある問題と認識している。これは、国際社会学科が 2000 年度に定員を割ったことを反省し、入学試験に関わる方針を検討し、指定校のリストの見直し、教員による高校訪問などを行い、学生確保の努力を行った結果、定着率がこれまでとは異なる傾向となったことによっている。情報文化学科は毎年、定着率が安定しているために、適切な範囲で学生数を確保している。福祉社会学科は、学部開設年次(1997 年度)に入学者が非常に多く、文部省からの指導をうけた。そのため、その後 3 年間は入学者が定員を超えないよう抑制に努め、現在は安定的に入学者を確保している。

入学者の増加に対する教育上の配慮については、語学科目のように学生数が多いことによって教育上大きなさしさわりのある科目についてクラス増などで対応し、教育上の支障は生じていない。講義科目は、ある程度を受講生の増加に対応できるよう当初より余裕をもって設定しているため、特に支障はない。演習科目は、少人数教育を守るという方針のもとでカリキュラム設計している。そのため、演習はクラス増の措置を講じるなどの対応で 10 人規模のクラスを維持している。福祉社会学科や情報文化学科の実習科目についても、同様に必要があればクラス増で対応している。

(退学者) **★93**

退学者は、1999 年度 12 名、2000 年度 8 名、2001 年度 10 名であった。1 年生と 2 年生に集中してみられるが、これはほとんどが進路変更による者である。4 年生での退学は、4 年間ほとんど授業に出席せず、卒業要件単位が足りないため退学を選んだ者である。

e. 人間科学部

(入学者選抜) ★72,73,74,75

人間科学部では、本学部が標榜する「こころ」「いやし」の領域に対しての社会的関心が高まりつつある状況を踏まえ、受験生にとっては自らの関心や志望、これまでの経歴等にもとづいて納得のいく適切な応募ができるとともに、学部にとっては意欲に満ちた、個性あふれる多彩な学生の選抜が可能になるように、また多くの学生のチャレンジを可能にするように、多様な入学者選抜方式を採用している。

種別としては、推薦入試の一般公募制、高校長の推薦による指定校制（併設校を含む）、通常の学科試験である一般入試（前期は2教科2科目・後期は1科目の選択による入試）、センター利用入試（前期は2教科2科目、後期は1教科1科目または2教科2科目選択による入試）に加え、社会人入試、海外帰国子女入試、外国人留学生入試がいずれも小論文（外国人留学生入試は日本語を指定）による入学試験として実施されている。また、2004年度入試から一般編入学試験、指定校制推薦編入学試験、社会人編入学試験などの編入学試験が実施される予定である。

表5-6 人間科学部 募集人数の入試別割合 (2002年度)

学 科		一般入試	センター利 用入試	指定校（併設校 を含む）推薦	公募推薦	計
現代子ども学科	募集定員	75		25		100
	割合	75.0%		25.0%		100.0%
心理学科 社会心理学専攻	募集定員	55		5		60
	割合	91.7%		8.3%		100.0%
心理学科 臨床心理学専攻	募集定員	45		5		50
	割合	90.0%		10.0%		100.0%
芸術表現療法学科	募集定員	45		5		50
	割合	90.0%		10.0%		100.0%
合 計	募集定員	220		40		260
	割合	84.6%		15.4%		100.0%

推薦入試の一般公募制は、2002年度は行われなかったが、2003年度は他学部と同様に、人間科学部の各学科専攻を強く希望する学力・人物ともに優れた学生を広く全国から得るために、学校長の推薦を受けた者について小論文を課して選抜を行った。

推薦入試の指定校制は、他大学の類似学部等の入試情報から、大学、学部、取得可能な資格についての具体的な情報を持って推薦を希望する受験生が多いと予想され、本学部にとっても、意欲を持った学生の確保という点では重要な意義を持った制度であると認識している。指定校推薦による学生は、2002年度は募集定員の15.4%を占めている。これら

の受験生は受験以前に説明会やオープンキャンパスなどに積極的に参加しており、関連の情報を多く入手していることが確かめられている。2002年度の意欲・満足度調査においても、併設高校の出身者を含めて、志望度が強く、入学後も95%以上が満足感を持っていることが示されている。

指定校の選定は、併設高校以外については、各学科・専攻におけるそれまでの高校ごとの入学者数とともに各種資料にもとづく高校の大学進学実績も勘案して総合的に行っている。なお、芸術表現療法学科については、学科の特質から、音楽・美術などに関する専攻を持つ高校を重視しながら指定校を選定している。なお、これらの選定作業にあたっては過去のデータを参考に最終的な学科専攻ごとの出願数を予測し、指定校推薦入学者数の受入枠を満たしうるだけの数の高校を指定校として選定している。この一連の作業の結果、各学科・専攻により異なった指定校が選定されることになる。なお、人間科学部は、いずれも新しく発足した学科・専攻のため、2002年度入学試験については、学科・専攻内容の類似する既存学科のデータにもとづいて指定校の選定にあたったが、2003年度の推薦入試の指定校については、2002年度入学試験の入学実績等を参考とし、高校との信頼関係を維持することを念頭に置きながら選定を行った。

一般入試（前期・後期）の募集人数は、2002年度の場合、設置年度という制約から入学定員の80%以上を占めている。2003年度以降は他の入試方法も加わるので比率が多少下がるとはいえ、学部の学生確保の中核であることに変わりはない。現代子ども学科および心理学科は、幅広く学生を求め、2教科2科目選択で入学試験を行う。しかし、芸術表現療法学科では、国語または外国語(英語)の試験とともに、教科としての芸術の中から音楽(ピアノまたは声楽)実技または美術実技を選択することができる。この学科では、学生に対して音楽療法士(補)資格を取得させるのみでなく、将来、幅広く音楽や美術などが関わる表現療法の分野で活躍するために必要な芸術的能力を高めることも期待している。そのため、芸術面での能力を活かした受験が可能となるように選択科目の上で特別な配慮を行っている。

(収容定員と在籍学生数) ★89,90

在籍学生数の入学定員に対する比率は、現代子ども学科で1.25倍、心理学科社会心理学専攻で1.40倍、心理学科臨床心理学専攻で1.06倍、芸術表現療法学科で1.02倍となっている。社会心理学専攻の学生数が定員を大幅に上回っていることについて、すでに文部科学省から指摘を受け、改善が求められている。本学部は、現在、開設初年度であるためこれらの数値となった背景を分析することは難しいが、今後年次を重ねるなかで、定着率についても慎重かつ適切な判断を行い、在籍学生数を適正化することを考えている。

(退学者) ★93

人間科学部心理学科臨床心理学専攻で前期終了時に1名の退学者がいたが、クラス担任が十分に本人の状況を把握している。この学生は、他大学法学部の志望が明確であり、特

に心理的な問題等は持っていないことが明らかになっている。

2. 大学院における学生の受け入れ

(大学院研究科の学生募集と入学者選抜方法) ☆56

学生募集にあたっては、愛知県内の大学を中心に入学案内等のパンフレットの送付、新聞紙上での広告掲載、大学院研究科に関する合同説明会等を通じて、広報活動を行っている。

入学者の選抜方法としては、前期課程では一般入試、社会人入試（英文学専攻、社会学専攻では実施していない）、外国人留学生入試、および在学学生特別入学試験を行っている。一般入試に関してはいずれの専攻においても秋期と春期の2回行っている。また、後期課程においても一般入試（国文学専攻は春期のみ）、社会人入試、外国人留学生入試を原則として前期課程と同様に実施している。これらの多様な入学試験により、学部卒業直後の学生はもとより、多様な経歴を活かして大学院研究科において研究を志向する者に入学の機会を提供している。

一般入試では、専門科目とともに専攻によって英語の試験を課している。社会人入試においては小論文または専門科目、また外国人留学生については小論文（文学研究科のみ）と専門科目を課している。これ以外に、卒業論文や修士論文、研究計画書の審査とともに上記いずれの試験においても口述試験を行って、すべての結果を総合して適切な選抜ができるよう努めている。

(成績優秀者対象の特別選抜) ☆57

本学大学院研究科では学内推薦制度はないが、文学研究科では2002年度入学試験より、前期課程において学部4年生を対象に、人間生活学研究科では1999年度入学試験より、前期課程・後期課程ともに、在学学生の成績優秀者を対象に特別入学試験を実施している。

文学研究科では、研究計画書、内申書を提出させ、面接のみを実施している。また、人間生活学研究科では、後期課程（人間生活学専攻）については、修士論文と後期課程の研究計画書の提出を条件に面接のみで実施、前期課程については、3年次までの取得単位数が卒業に必要な単位数の75%以上であること、卒業論文の履修者であること、成績合計点が所定の点数をクリアしていることを条件に、卒業論文の研究計画書と面接によって行われる。この選抜による過去の入学実績は表5-7のとおりである。

表 5-7 在学生特別入学試験による入学者数

研究科名	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
文学研究科				
博士課程前期課程 国文学専攻			0	4
博士課程前期課程 英文学専攻			0	1
博士課程前期課程 社会学専攻			10	5
人間生活学研究科				
博士課程前期課程 消費者科学専攻	0	0	1	2
博士課程前期課程 人間発達学専攻	5	1	3	3
博士課程後期課程 人間生活学専攻	9	2	0	0

(他大学・大学院学生への門戸開放) ☆58

他大学・大学院の学生に対する門戸開放の状況については、両研究科とも、入学選考の際の学力試験(口述を含む)において本学学生と扱いの差をつけることなく対応しており、入学に関して広く門戸を開放している。過去の受験実績、ならびに入学実績は表 5-8 のとおりである。

表 5-8 他大学からの受験・入学状況 (1998 年度～2002 年度)

研究科名	他大学からの受験者数	入学者数
文学研究科		
博士課程前期課程 国文学専攻	11	4
博士課程前期課程 英文学専攻	6	2
博士課程前期課程 社会学専攻	6	3
博士課程後期課程 国文学専攻	0	0
博士課程後期課程 英文学専攻	8	2
博士課程後期課程 社会学専攻	2	2
人間生活学研究科		
博士課程前期課程 消費者科学専攻	4	1
博士課程前期課程 人間発達学専攻	22	7
博士課程後期課程 人間生活学専攻	5	2

(飛び入学制度) ☆59

いわゆる飛び入学の制度に関しては、大学院学則に後期課程についての規定があるが、実際に適用した例はない。

(社会人学生の受け入れ) ☆60

社会人学生の受け入れについては、文学研究科においては国文学専攻のみで実施しているが、入学者は現時点ではない。一方、人間生活学研究科では、社会人特別入試を積極的に導入しており、実施当初から積極的に応募する者が多く、また入学者もほぼ毎年安定している。受験および入学の実績は表5-9のとおりである。

表5-9 人間生活学研究科における社会人の受験・入学状況（1998年度～2002年度）

研究科名	受験者数	入学者数
人間生活学研究科		
博士課程前期課程 消費者科学専攻	6	4
博士課程前期課程 人間発達学専攻	20	7

（科目等履修生、研究生、聴講生） ☆61

科目等履修生、研究生、聴講生等の制度に関してはいずれも規程に定められており、受け入れにあたっては学歴のみではなく、社会における実績なども勘案して、弾力的に運用している。過去の実績は表5-10のとおりである。

表5-10 科目等履修生・研究生・聴講生の受け入れ状況（1998年度～2002年度）

研究科名	科目等履修生	研究生	聴講生
文学研究科			
博士課程前期課程 国文学専攻	0	0	10
博士課程前期課程 英文学専攻	0	0	5
博士課程前期課程 社会学専攻	0	0	0
博士課程後期課程 国文学専攻	0	0	6
博士課程後期課程 英文学専攻	0	11	4
博士課程後期課程 社会学専攻	0	19	0
人間生活学研究科			
博士課程前期課程 消費者科学専攻	0	7	0
博士課程前期課程 人間発達学専攻	1	20	12
博士課程後期課程 人間生活学専攻	0	26	0

（外国人留学生） ☆62,63

外国人留学生に関しては規程にもとづいて受け入れている。過去の受験実績、ならびに入学実績は表5-11のとおりである。なお、文学研究科においては1998年度以降、留学生の受験はない。

表5-11 人間生活学研究科における留学生の受験・入学状況（1998年度～2002年度）

研究科名	受験者数	入学者数
博士課程前期課程 消費者科学専攻	1	1
博士課程前期課程 人間発達学専攻	1	1
博士課程後期課程 人間生活学専攻	4	3

これらの学生の受け入れに当たっては、本国における学制に関する情報を綿密に集め、本人の能力を客観的に測定できる情報を確かめるなど、個別に慎重に対処している。

（学生定員の充足状況） ☆64

以上の各選抜方法にしたがって、本学の両研究科は学生を受け入れており、これらを合計した各専攻における入学者数の推移は表 5-12 に示すとおりである。各年度により多少のばらつきはあるものの、特に著しい欠員は生じていない。また、入学者の中に大学院生としての研究遂行に支障をきたすような例もなく、学生の受け入れ体制に関してはおおむね適切であると判断される。なお、学生定員は、文学研究科は前期課程が各専攻とも 5 名、後期課程が 2 名、また人間生活学研究科は前期課程が各専攻とも 8 名、後期課程は 3 名である。

表 5-12 大学院研究科の学生定員充足状況

研究科名	定員	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
文学研究科						
博士課程前期課程 国文学専攻	5	2	6	2	2	4
博士課程前期課程 英文学専攻	5	2	2	5	2	2
博士課程前期課程 社会学専攻	5	1	3	11	11	6
博士課程後期課程 国文学専攻	2	1	2	1	1	1
博士課程後期課程 英文学専攻	2	4	3	1	1	3
博士課程後期課程 社会学専攻	2	2	1	0	3	6
人間生活学研究科						
博士課程前期課程 消費者科学専攻	8	5	2	1	1	4
博士課程前期課程 人間発達学専攻	8	14	5	5	6	7
博士課程後期課程 人間生活学専攻	3		10	6	4	1